動物を守ることについての気持ちの変化

動物応用科学科 3 年　坂本有加

In the Future,
Hello, everyone. Today, I'm going to talk about my dream. As you know, global warming is advancing now. Because the ice of the North Pole melts early, bringing up of polar bears becomes difficult. Up to now, mother bears raised two children at a time. But now, they raise only one child. It is said that polar bears will die out in 20 years. I want to do work to save such animals. Thank you.

これは高校２年生の時、英語の授業で私がスピーチしたこと。将来の夢について、全員が１分間のスピーチをした。みんなの前で緊張したが、自信を持って話した。普通科の高校だからか、動物のことを話す人は他に誰もいなかった。英語の先生も ALT の先生も褒めてくれて、がんばってねと言ってくれた。それが嬉しかったので、この時のことは今でもよく覚えている。

オープンキャンパス

それから数年経った今年、無事に麻布大学に入学し 3 年生になった私は、オープンキャンパスの研究室紹介コーナーで、訪れる高校生や保護者の皆様に大学生活や研究室を紹介していた。訪れて下さった方は、年齢も興味も様々だけれど「野生動物の保全をしたい。自然を守りたい。」という気持ちを持っているのを感じた。私も同じ様に思っていたなぁと思った。それでスピーチのことを思い出した。だから不安な面も含めて、気持ちはよく分かる。「その夢を持ったまま、入学してきて下さい。一緒に頑張りましょう！待っています。」と伝えた。けれど、自分たちが今なにを考えてどのようなことをしているのか、きちんと伝えたいと思った。以下は、頭を整理するためにその時書いたメモの内容。

野生動物の保全をしたい。自然を守りたい。
それを守るには、どうして守る必要があるかを説明しないといけない。
生き物が、生き物のつながりの中で何をしているのか。
どんな役割を持っているのか。
それを明らかにすることは、楽しい。

そして、皆さんにこう話した。「いきなり野生動物の保全の研究をすることは、難しいと思います。でも、保全に直接関わらなくても、自分が地道に調べたことが、将来、保全につながるかもしれない。そういう思いで研究しています。」と。

ロードキル

今年の大学祭では、生き物のつながり（リンク）と動物の交通事故（ロードキル）の展示をした。ロードキルの会場で一面に並んだ 394 個のタヌキの頭骨を目の前にして、私は「すごい！」としか言えなかった。自分たちの展示に自信を持ったし、たくさんの人に見に来てほしいと思った。同時に、この頭骨標本は誰が作ったのか？と考えた。いつの間にか 394 個に増えたような

つもりでいたが、標本が勝手に増えるわけがない。私自身はあまり標本作りに貢献していなかったと反省した。それでロードキル解剖（ロードキルに遭った動物を清掃局から引き取り解剖･採材する）になるべく参加しようと思った。解剖場で見るタヌキは血まみれで、骨は何か所も折れている。内臓や眼球が飛び出していることもある。疥癬で毛が抜け皮膚がごわごわになった個体もいる。けれど、外傷もなく眠っているだけのようなきれいな死体を見るのはもっとつらい。健康な若いタヌキが車にひかれて死んでいる。みんなこの冬を乗り越えるためのフワフワの冬毛をもった、たくましい立派なタヌキだ。車なんて作ってごめん。道路を敷いてごめん。申し訳ない気持ちでいっぱいになりながら、作業する。頭骨標本を作るために首にナイフを入れる時が、一番つらい。

394 の頭骨があるということは､394 の死体があるということだ。私は、標本からは声が、死体からは叫びが聞こえてくるような気がする。動物は喋ってはくれないから、私たちは聞こえない声を聞こうと努力しなければならない。解剖は、その声を聞ける貴重なチャンスだと思う。初めは解剖が好きで参加していたけれど、交通事故が起きないで、ロードキルの解剖なんてする必要がなくなればいいと強く思う。どんなに地味でも、ここで作業することが少しでも野生動物のために、ロードキルを減らすことに役立ったら嬉しい。

次の一年

今年はいろいろな所に行ったし、いろいろな経験をした。中でもモンゴル調査は貴重な体験だった。今まで大きなけがや病気もなく、無事に過ごせたことを有り難く思う。不安なこともあるけれど、好きなことに取り組めることに感謝し、来年も楽しく過ごしたい。